

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：15201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16763

研究課題名(和文) 奉納和歌の発生と展開に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Beginning and Development of Votive Waka

研究代表者

野本 瑠美 (NOMOTO, Rumi)

島根大学・学術研究院人文社会科学系・准教授

研究者番号：40609187

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：神社仏閣に奉納された和歌。奉納和歌の研究は近年急速に進展している。だが、「奉納」とみなす基準は研究者によって様々で、時には歌人の内面に存する「思想」によって判断することも行われた。このような状況に対し、本研究では詠作状況から「奉納」を判断する手法を提唱した。その手法によって平安期の奉納和歌の事例を収集し、「法楽和歌」よりも「奉納和歌」が用語として妥当であること、奉納和歌の始発は、従来の指摘よりも百年以上遡り、少なくとも10世紀から日常的に行われていたこと、11世紀に和歌奉納が多人数化・晴儀化し始め、12世紀末にかけて、社会的立場づけが変化し、様式が多様化していくことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

奉納和歌研究の中でこれまで曖昧なままにされてきた「奉納和歌」の判断基準について、新たな判断方法を提唱し、それに基づく奉納和歌史を構築した本研究は、今後の奉納和歌研究の土台となり得る重要な意義をもつ。近年、個々の歌人や作品に着目した奉納和歌研究は大きく進展してきたが、本研究はこれらの成果を統合、俯瞰するような試みであった。また、本研究遂行過程で、応制和歌や私家集の研究に関しても新見を提示することができた。本研究は、奉納和歌研究のみならず、中世和歌研究の進展にも寄与できたと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The study of votive waka(hono waka) has made rapid progress in recent years. However, the criteria for what researchers consider to be votive waka vary from person to person. In this study, I proposed a method for judging votive waka based on the situation of composition. Through this method, I have collected examples of votive waka from the Heian period and found the following. (1) "Hono waka" is a more appropriate term than "horaku waka". (2)The beginning of votive waka was more than a hundred years earlier than previously known, and votive waka has been practiced routinely since at least the tenth century. (3) In the eleventh century, votive waka began to become more numerous and more ceremonial. Towards the end of the twelfth century, the social position of votive waka had been increased and the styles of votive waka became more diverse.

研究分野：日本文学

キーワード：和歌文学 奉納和歌 百首歌 法楽和歌 平安時代

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

奉納和歌とは神社仏閣などに奉納される和歌のことで、平安時代末期には、天皇や上皇の命に
応じて献上される応制和歌とならば重要な詠作契機として認識され(藤原清輔『和歌現在書目録』
序文)、以後、中世・近世を通じて膨大な数の奉納和歌が生み出されてきた。研究開始時点にお
いて、奉納和歌に関する研究は急速に進みつつあったが、論者によって「奉納」の定義や用語の
使用などに微妙な差異が認められ、ほぼ同じ問題意識を共有しながらも、論者によって「奉納」と
「法楽」という異なる名称が用いられていた。さらに呼称以上に曖昧なまま放置されていたのが、
奉納和歌の定義である。たとえば、山田昭全氏(『和歌大辞典』(明治書院、1986年)「法楽和歌」
の項)は『相模集』の走湯権現奉納百首を「法楽和歌の先蹤」としつつも「法楽和歌の意識があ
ったかどうか疑問」とし、詠歌の背後に存する思想に着目して「西行の伊勢神宮に奉納した二つ
の自歌合は法楽和歌の典型とみなされる」とする。だが、すべての歌人が自己の思想を書き残し
ているわけではなく、「法楽和歌の意識」の有無に基づく区別は非常に困難である。また、特定
の歌人や作品を中心とした研究が主流となっており、奉納和歌全体の動向や展開を把握する取
り組みはほとんど行われていなかった。安井重雄氏によって平安期の受領による和歌奉納の実
態(「社頭歌合の成立と性格」和歌文学会四月関西例会発表、2015年4月)や浅田徹氏による中
世後期定数歌における法楽和歌の特質(「中世後期法楽定数歌の機能について 速詠化、続歌と
の「棲み分け」」『和歌文学研究』110、2015年6月)等によって通史的な展望による研究の端緒
が開かれたものの、奉納和歌の詠作数が増大する平安末～鎌倉初期の動向に関する検討はいま
だ為されていないのが現状であった。

2. 研究の目的

このような研究状況を踏まえ、本研究では、詠歌に関わる具体的記述に即しながら、和歌の「奉
納」という行為を定義し、その上で、奉納和歌が和歌史の中でどのように生まれ、位置づけられ
ていくかを明らかにすることを目的とした。

具体的には、以下の3点の課題に取り組むこととした。

(1) 奉納和歌の定義

先述したように、現在の奉納和歌研究では「奉納」と「法楽」という二つの語が使用され、論
者によってその使用に微妙な差異が見られる。これまでの個々の研究を有機的に結びつけてい
くために、まずは奉納和歌の定義を明確にする。

(2) 奉納和歌の通史的研究

奉納和歌の定義は、「何を」奉納和歌と見なすかということであり、それは「いつ」奉納和歌
が始まったのかということと密接に結びついている。いち早く奉納和歌史を論じた早川正道
氏(「法楽和歌の史的展望」『東洋学研究』1、1931年12月)は、「法楽和歌の萌芽」として延
久四年三月催行の「気多宮歌合」や相模の走湯百首をあげ、特に成立時期から走湯百首を「法楽
和歌の濫觴」と呼んだ。一方、山田昭全氏(「本地垂迹論と和歌」『山田昭全著作集3 釈教歌の
展開』おうふう、2012年)は西行や慈円の歌作を「法楽和歌」の始まりと位置づけている。研
究代表者は以前、拙稿「『経盛集』と奉納 寿永百首をめぐる一考察」(『和歌文学研究』100、
2010年6月)で、『寿永百首』を中世盛んに行われる奉納百首の出発点と位置づけたが、百首歌
以外の詠作・歌集・歌合などにも対象を広げ、検討することが必要である。

(3) 奉納和歌に関する基礎的資料の整備

奉納和歌の総体を捉えるためには、分析の基盤となる本文資料の整備が不可欠である。たと
えば、天神を作者に擬した歌集(天神仮託歌集)は、奉納和歌の変形の一つと考えられるが、『新
編国歌大観』等に収録されておらず、鎌倉期以前に成立し、中世以降広範に流布していながら、
和歌研究の中で言及されることはきわめて少ない。研究代表者はこれまでに「天神仮託歌集」の
本文をデータ化し、検索が可能となるように整備をすすめていた(2015年度データ入力完了予
定)が、さらなる伝本調査や本文データの検索の利便性を高める作業が必要と考える。

3. 研究の方法

前項に掲げた3つの課題に即して、以下のような方法で調査・考察を行った。

- (1) 奉納和歌の定義：平安期から鎌倉初期の和歌作品の序跋や詞書の記載などから、「奉納」という行為がどのように捉えられていたかを調査し、「奉納」という行為の実態を明らかにする。
- (2) 奉納和歌の通史的研究：(1)で得られた成果を踏まえつつ、奉納和歌の発生と展開の過程を明らかにする。作品研究と通史的な把握を組み合わせ、奉納和歌の歴史的な展開を追う。
- (3) 奉納和歌に関する基礎的資料の整備：「天神仮託歌集」のデータベース構築のため、諸本調査や他出調査などを行う。また、奉納和歌研究に資する資料の調査や紹介などを行う。

4. 研究成果

(1) 奉納和歌の定義

従来「法楽」と「奉納」の語が混在し、研究者によって定義が様々であった奉納和歌について、従来の「法楽の思想」の有無を判断基準とはせず、詠作状況からの奉納和歌を定義することを旨とし、作品形態にとらわれず、奉納の可能性のある平安期の和歌を網羅的に収集・検討した。その結果、「法楽」よりも「奉納」の語が用語として妥当であること、奉納和歌の始発は従来の指摘よりも百年以上遡り、少なくとも10世紀の段階で個人や少人数による和歌奉納が日常的に行われていたことを明らかにした。この成果は、単著『中世百首歌の生成』(若草書房、2019年7月)第三篇第一章にまとめた。

平安時代の諸歌集には、寺社へ「よみてたてまつる」「かきてまゐらす」等の奉納行為を詞書で明示する歌や、幣などの奉納物に「かきつけ」て共に納めた歌がある。これらは、神仏への祈願内容を詠み込んだものが多く、当時の歌人たちが「奉納和歌」とみなしていた事例と考えられる。従来は「詠者の思想」に拠って奉納和歌が否かを分類していたが、本研究においては、詞書等の「記録」に基づく分類法を提起した。調査の過程で、奉納行為は明示されないものの、寺社等の聖域内に「かきつけ」た歌や参詣歌の中には、先の奉納和歌と共通の発想・内容を持つ歌も散見された。今回の手法をもとに、今後さらなる調査が必要であろう。

(2) 奉納和歌の通史的研究

(1)の事例をもとに、奉納和歌の始発期から中世への展開を概観し、拙著『中世百首歌の生成』(若草書房、2019年7月)第三篇第一章にまとめた。10世紀までは個人や少人数を中心とした和歌奉納や参詣での詠歌が、11世紀に入ると多人数化・晴儀化し、12世紀末の奉納和歌の隆盛にむけ、社会的立場の変化や奉納方法の多様化の画期となっていたことを指摘した。このように奉納の形式が生まれ整えられていく動向と連動し、和歌の「形式化」(様式化)という観点から、～の発展的課題にも取り組んだ。

百首歌という形式の定着と発展

百首歌とは、百首を一単位として詠む和歌の詠作形態のことで、12世紀初頭の『堀河百首』を契機として、奉納和歌を始め、公的な場で和歌を詠進する際の最も重要な形式として定着していった。本研究では、晴儀性を帯びた公的百首の定着において、『堀河百首』に続く、『久安百首』が和歌史上に大きな影響を及ぼしていたことを明らかにし、帝の命令によって詠進される応制百首の系譜と、奉納百首の系譜を組み合わせることで、和歌史上における百首形式の定着と発展についての展望を示した(拙著『中世百首歌の生成』若草書房、2019年7月)。

長歌形式の再発見

応制百首に見られる長歌形式による述懐から、平安末期～鎌倉初期において長歌形式に新たに目撃された意義を考察し、同時代の奉納和歌と共通する思想・背景などを明らかにした。その成果は拙稿「崇徳院と長歌」(『国語と国文学』95巻2号、2018年2月)にまとめた。平安時代に入って詠作数が激減した長歌形式の和歌であるが、平安末期から鎌倉初期にかけて、ふたたび長歌が歌人たちに注目され始めた。その端緒となったのが崇徳院主催の『久安百首』であった。公的な場での詠歌にふさわしい「形式」が模索される中で、長歌形式に着目する歌人が増えたわけだが、このような発想は、同時代の奉納にふさわしい「形式」を模索していく傾向とも軌を一にする。

さらに、崇徳院遺詠長歌に対する俊成の返歌を調査し、成果を論文にまとめた(現在投稿中、2020年度内に刊行予定)。院崩御後に届けられた院の遺詠に対し、俊成は院と同じ長歌形式で返歌を詠み、「愛宕」へと送った。この愛宕へ送る行為が院への追善供養であったことを明らかにし、以後密やかに連続する院追悼の動きとの関連性を指摘した。

目的に即した形式の活用と編纂

平安末期、一定の形式のもと、その形式の特徴を最大限に利用し、編纂目的を達成する手法が諸歌人によって編み出されていく。平安末期の家集『粟田口別当入道集』『隆房集』の表現分析を進め、家集編纂と自己表現の手法を検討し、それぞれ「源頼政と藤原惟方」「粟田口別当入道集」を中心に(中村文編『歌人源頼政とその周辺』青簡舎、2019年3月)、「百首歌としての『隆房集』」(『国文学研究』187、2019年3月)と題した論文として発表した。

(3) 奉納和歌に関する基礎的資料の整備

奉納と同じ信仰心を土壌として生まれた作品に、神を作者に擬した家集・百首(仮託歌集)の存在が挙げられる。研究代表者はこれまで、天神に仮託された家集・百首(天神仮託歌集)の伝本調査・分析を通して、従来未詳とされてきた天神仮託百首の成立過程の一端を明らかにし、表現分析や他作品との比較等を容易にするための本文データベースの作成に取り組んできた。実施期間中に、家集8系統、百首6系統(武井和人氏の分類に拠る)約2200首の和歌本文の入力に加え、出典や他出(他資料所見の有無)の情報を追加した。

また、データベース作成の過程で浮上した問題点について、文学と歴史学の研究者による菅原道真と天神信仰に関わる研究会(2017年3月)で報告し、その後、天神和歌と奉納和歌の関係

についての論考を執筆し（拙著『中世百首歌の生成』若草書房、2019年7月、第四篇第一章）従来和歌文学の異端とされてきた「天神の和歌」を奉納和歌史の中に位置づけた。

（4）今後の研究の展望

本研究では、詠作状況からの奉納和歌を定義することを提唱し、作品形態にとらわれず、奉納の可能性のある平安期の和歌を網羅的に収集し、用語の再検討や平安期奉納和歌の史的展開の一端を明らかにした。しかしながら、平安期という狭い期間、かつ粗い見取り図を示した段階に留まっている。調査段階で、奉納和歌の詠作数増加と相関関係を為す託宣歌の記録増加や、社頭作文会や詩集奉納の先例、参詣歌の位置づけなど、従来の「奉納和歌」の範疇にとどまらない作品群との関連も見えてきた。これらの成果や課題を踏まえ、和歌奉納とはどのような行為か、奉納和歌とは何か、どのような史的展開をとげるのか、より深く、より広い範囲を視野に入れながら検討することが必要と考える。今回得られた課題については、科研費・基盤研究(C)「奉納和歌史構築のための基礎的研究」(2020年～2024年)で引き続き取り組んでいく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 野本 瑠美	4. 巻 187
2. 論文標題 百首歌としての『隆房集』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国文学研究	6. 最初と最後の頁 1 14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野本 瑠美	4. 巻 1031
2. 論文標題 崇徳院と長歌	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 36-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野本 瑠美	4. 巻 37
2. 論文標題 「愛宕の辺になん遣らせける」考 崇徳院遺詠に対する俊成の追悼について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 島大国文	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野本瑠美
2. 発表標題 「天神仮託歌集」の研究と展望
3. 学会等名 第一回「菅原道真と天神信仰」研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 野本瑠美
2. 発表標題 和歌発祥の地出雲と古代・中世の文芸
3. 学会等名 いづも財団公開講座 第 期（平成28年度）「主題：出雲地域の学問・文芸の興隆と文化活動」（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 中村文編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 青簡舎	5. 総ページ数 389 (21)
3. 書名 歌人源頼政とその周辺（野本瑠美「源頼政と藤原惟方 『粟田口別当入道集』を中心に 」）	

1. 著者名 公益財団法人いづも財団、出雲大社御遷宮奉賛会編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 今井出版	5. 総ページ数 227 (15)
3. 書名 出雲地域の学問・文芸の興隆と文化活動（第一章1、野本瑠美「和歌発祥の地出雲と古代・中世の文芸」）	

1. 著者名 野本 瑠美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 若草書房	5. 総ページ数 315
3. 書名 中世百首歌の生成	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----